

平成20年7月10日

亜細亜大学アジア研究所所報

第131号

タイと日本 姓名に対する意識の違い

谷津 清美

今年二月、タイは二〇〇六年に起きたクーデターから一年半をかけて、やっと新内閣発足にたどりついた。しかし、まだまだ心配の種は尽きず、いまだ不安定な政治に加え、ガソリン価格の高騰はすべての消費財の値上げを更新し、経済の先行きも明るくない。それでも人々は生活していかなくてはならない。ここは努力、忍耐、節約を標語にし、タイ国民が丸となって国を守るべきところだが、タイ人は愛国心にかけては満点な民族なのに、努力、節約など歯をくいしばることに、どうも馴染みが薄いらしい。そのかわり、景気が低迷するとタイならではの面白い現象が見られる。

名を変える

その現象とは、改名する人が増えるということだ。事業の運営、健康状態、家庭の問題などに不運が生じると、タイではその解決策を改名に委ねる傾向がある。

タイ人は元来占い好きで、占い師に改名を勧め

められると即実行に移してしまう。人生の途中で三、四回名前を変える人など、まったく珍しくない。つい最近では、歯に衣着せぬコメントで人気のあるラジオのニュース解説者、MS・スウィモン。我が家でも毎朝の時計代わりになっている番組だ。いつもと変わらぬ声なのに、キャスター紹介でMS・ボンバットとなっていた。彼女も何らかの理由で名前を変えたに違いない。しかし、相手の男性キャスターも、またリスナーも動じる気配などまったくなく、いつもと変わらず番組は進行していた。ほとんどの人が、開運を願い改名するわけだが、この頃は流行に乗って名を変える若い子も増えている。「*penpen*」、「*pen*」は「*pen*」の音を持つ子音で、ラランロンと読む。たぶんこの女性は今月日などを占って、母音を使用してはいけなかったのだらうと想像できる。「*pen*」エチオピアと読む。エチオピア人の父とタイ人の母を持つ女性の名だ。「*pen*」キットゥンサム、意味は「miss you always.」こうなると、インパクトは強いが、開運の域を

超えて受け狙いとしが捉えようがない。

名前を変えても、社会や学校で不便を感じることはない。タイでは、幼少時のみでなく大人になってもニックネームが通用するからだ。ニックネームは誕生時、あるいは幼少時に肉親が付けることがほとんどだ。妊娠中に母親がソム（みかん）を好んで食べたことから「ソム」。将来ベントを運転できるくらい成功してほしいことから「ベント」。本名の音の一部をとつたりと、本当に千差万別だ。本名は、その人の人生を左右するもので、僧侶、年長者、姓名判断などによって、慎重に決められることが多いが、ニックネームは気軽につけられ、生活に密着している。家族も友人も学校の先生も、会社の上司までがニックネームで呼ぶ。本名よりもニックネームを使う頻度のほうが多く、下手をすると本名を知らない友達もいる。社会に比重の大きいニックネームだが、人生の運気に関わる比重は小さいらしく、本名は変えるが、ニックネームを変える人はとても少ない。かなり体格のいい大人が子供の頃のニックネームのまま「レック（小さい）」と呼ばれているのは面白いものだ。

姓を変える

さらに、タイでは名前ばかりでなく、姓までも簡単に変更してしまう。それも勝手に創作しているのだから驚きだ。勝手に創作といっても、タイ語（仏教経典からの引用も多く、サ

ンスクリット語などの古代語も含む)の意味を持つことが条件であり、変更の理由も必要だ。理由は様々だが、やはり「運勢を変える」が大部分のようだ。役所に届け出る新しい姓は、すでに登録済みのものは受理されないで、姓の重複はなく、同じ姓は必ず親戚なのである。

日本の姓をそのままタイ語の姓にすることも可能だ。しかし、それに近いタイ語の発音と表記、意味を当てなければならぬ。例えば、中谷という姓を「นาค」ナーク(神話に登場するヘビの姿をした半神)と「ธำม์」ターニー(都)を併せて「นาคะธำม์」ナークターニーとすれば、「神話に登場する神蛇の住む都」という解釈ができる。坂本は「สุกศรี」サッカ(帝釈天)と「โมทย์」モート(喜び)を併せて「สุกศรีโมทย์」サッカモート(帝釈天の喜び)となり、どちらも造語ではあるが、意味も語感もよいタイ語の姓となる。実際、外国の姓を語源とするタイ姓をつける国際結婚の家庭も多くある。

日本では継承を当然とする姓が、タイではことも容易に変えられているということは、日本とタイとで、姓に対する意識に大きな差があるに違いない。そもそもタイ人の姓は、日本と同じく先祖から代々受け継ぐものであるが、その法的義務はなく、旧王朝の血筋(姓のあとに、ナアユタヤ や ナ チェンマイなどがつく)財閥、名門は別格として、一般市民の間に

は、姓は各家庭で持つてもよいという観がある。成人して、独立や結婚などにより新家庭を築いたり、現姓に不服な場合。また、より大きな幸福を求めて姓を変えるのは、ごく自然なことでと捉えられている。

姓の歴史

改姓は改名に比較すると、その数はかなり少なくなるが、私の知人だけでもすでに五家族が姓を新しくしている。偶然か否かそのすべてが中華系タイ人だ。というのも華人のタイ語姓名歴はそう古くなく、いまから五〇年前前までは中国名をタイ語で表記しただけだった。その後タイで暮らす便宜上、タイ語の姓名をつけることになったのだが、その時創作された姓は、中国姓にタイ語の語尾を付け足したり、占いで決めたり、長兄がつけたものをとりあえず拝借して……などと、姓に対して執着がうすい理由がわかるケースも多く、機会があれば改姓したいという意識の人が大勢いる。ちなみに我が家の姓は、「เสียมกอบสงฆ์」リアンコーサクル。「เสียม」リアンは中国姓の「連」の読音。「กอบ」コーはタイ語で「草や木の根元から多く分岐して生えているもの」。「สงฆ์」サクルは「氏族」。全体で「連ファミリー」という意味を持つ。義父の世代につけられた姓だ。私が嫁いだ当初、義父の兄弟は全員「連ファミリー」を名乗っていたが、いつの間にか違う姓の親戚が増えていた。また、夫には四人の兄弟

がいるが、末弟家族は最近姓を新しくし、本人を含め家族四人の名もフルチェンジした。運氣も上昇してきたようで、兄弟の中でも好評を得ている。

それでは、中華系ではなくタイ民族の姓はどうであつたのだろうか。タイ民族の姓はラーマ七世時代(一九二五―一九三五)に広まったと言われている。それまでは、国王の側近や、王室に従事していた者のみが、国王から与えられた姓を持っていた。その他の町民や農民は、日本の歴史にもみられる様に、名のみで暮らしていた。姓の中には、タイ語、バリー語、サンスクリット語などがあり、タイ人にはちゃんと区別がつくそう。中には出身地が明確になる姓もあり、地方出身者のコンプレックスが改姓を促す場合もある。

タイは、タイ人であれ華人であれ、希望があれば姓も名も変えられる。よく言えば、過去にとらわれず、心理面で気軽に人生をリセットし、常に前向きに生きられる国。悪く言えば、運任せで責任逃れがまかり通る国。しかしどう転ぶかは当人次第。姓を変えても血縁の繋がりは日本以上に濃く強い。姓や名前という殻にこだわりの、己という無限の可能性に囲いを作っているのは、私達のほうかもしれない。

またまた私の視野を広げてくれたタイでの生活に感謝しよう。

(たにつきよみ・タイ語通訳、バンコク在住)